

当財団では、産・学・官のネットワークづくりと情報交換の場を提供することを目的として、社会、経済から最新技術に至る幅広い分野の中から、時宜にかなったテーマを選定し、中部社研フォーラムを開催しております。

本レポートは、第283回（2016年9月9日）での講演「命のビザ、遥かなる旅路」～その後～杉原千畝を陰で支えた日本人たち」を元に、講演者のフリーライター北出明氏に執筆いただいたものです。

## 敦賀に上陸したユダヤ人たち



フリーライター 北出 明

### はじめに

ここ数年、第二次世界大戦中にナチスの迫害を受け、ヨーロッパから逃げ出そうとしていたユダヤ人に日本への通過ビザを発給し、6千人の命を救ったと言われる日本人外交官、杉原千畝に対する注目がますます高まってきている。昨年12月に一般公開された東宝配給映画『杉原千畝』が、その傾向に一段と拍車をかけている感がある。

そのような状況の下、2016年7月13日、「杉原千畝ルート推進協議会」が発足した。構成メンバーは、杉原千畝の出身地である岐阜県八百津町、ユダヤ難民が上陸した敦賀市、加えて外国人観光客が多く訪れる高山市、白川村、金沢市。その後、杉原千畝が中学時代を過ごした名古屋市が加わり、合計6自治体となった。

折しも、「観光立国」が叫ばれたときからの念願であった“インバウンド2千万人達成”が実現され、「千畝ルート」はまさに時宜を得た政策と言えよう。

ところで、私はある偶然のことから、直接的ではないが、いわゆる「杉原ビザ」に関連する出来事にかかわることになった。その顛末<sup>てんまつ</sup>をご紹介します。

### 古いアルバムとの出会い

今から18年前の1998年5月のこと、5年間の海外勤務を終え、帰国挨拶にかつての上司大迫辰雄



写真1 大迫さんに残された7人の顔写真



写真2 晴れた日の「天草丸」船上（左端が大迫さん）

さんを訪問した。儀礼的な挨拶もそこそこに私は尋ねた。

「大迫さんは第二次世界大戦が始まったころ、ナチスの迫害を受けてヨーロッパから逃げ出してき

たユダヤ難民の海上輸送を担当されたそうですね。その時の様子を聞かせてください。」

大迫さんは、1938年に現在の株式会社ジェイティービー（以下、「JTB」）の前身であるジャパン・ツーリスト・ビューローに入社し、戦中・戦後の混乱期を経て、高度経済成長が始まったころの1966年に特殊法人国際観光振興会（現在は独立行政法人国際観光振興機構、以下「JNTO」）に出向してこられた。時を同じくして、大学を卒業し、JNTOに就職した私は大迫さんの部下となった。

「ああ、あの時のことね。大学の同窓会の文集に僕の回想記が載っているから、それを読んでもらえばわかるよ。それから、ここに当時の写真を収めてあるから一緒に見てみて。」

差し出されたのは文集とともに一冊の古びたアルバムだった。当時大迫さんが従事した海上勤務の様子がうかがえるセピア色の写真が5、6ページにわたって几帳面<sup>きちょうめん</sup>に整理されていた。そのうちの1ページに7人の人物の顔写真が貼られてあった。男性1人、女性6人。寂しそうな表情、暗く厳しい視線、頼りなげな微笑、いずれも何かを訴えてくるような顔つきが圧巻であった60年近くもの間、よくぞ大切に残されていたものである。

大迫さんの説明によると、大迫さんがこの任務に就くに至った経緯はおおよそ次のとおりであった。

1940年前半ころからジャパン・ツーリスト・ビューローはアメリカのユダヤ人団体からの要請で、ヨーロッパのユダヤ人のアメリカへの逃避行を支援する業務を行うようになった。その経路は、シベリア横断鉄道でモスクワからウラジオストクまで行き、そこから日本の船（天草丸、2,346トン）で福井県の敦賀に上陸するというもので、ナチス・ドイツがヨーロッパの大部分を制圧したため、それが彼らに残された最後のルートであった。

そのウラジオストク～敦賀間の海上輸送が大迫さんに課せられた任務だった。期間は1940年末頃から翌1941年春までで、日本海が最も厳しい冬場であった。

「船が進まないんだ。風と波が激しくてね。本当

にいつ沈むかと…。よく生きて帰れたものだとなっていて思うよ。乗船客もほとんどがみすぼらしい服装で、うつろな目をしていて、祖国を追われた流浪の民の悲哀を漂わせていたよね。あの時ほど自分が日本人に生まれてきてよかったと思ったことはなかったね。」

今しがた目にした7人の写真と大迫さんの体験談とが、大きな感動の渦となって迫ってくるような気がした。

そのときの感動から5年経った2003年6月、大迫さんは86歳の生涯を閉じた。お元気なうちにもっと詳しく話を聞いておくべきだった…。私は深い後悔の念に駆られた。

ちょうどその頃、外務本省の訓令に背き、人道的見地からビザを発給した杉原千畝氏の話がこちらで評判になっていた。しかし、それらのユダヤ難民がどのようにして日本にたどり着き、その後どうなったかについてはほとんど触れられることはなかった。

このままでは、当時のジャパン・ツーリスト・ビューローが果たした役割が多くの人に知られることなく現代史に埋もれ去って行くのではないだろうか。また、日本に逃れてきたユダヤ難民のほとんどは福井県の敦賀港に上陸し、そこで一般の市民たちに温かく迎えられたと聞かすが、そういった事実もいずれ人の記憶から消えて行ってしまうことになるのではないだろうか。それではあまりにも惜しい。

私は行動を起こす決心をした。しかし、どこから何を始めるべきか？ まずは、そもそもの出発点となった大迫さんのアルバムを手に入れることにした。

「いつまでも父のことをお考えくださり、心から感謝しております。どうぞ、このアルバムはお好きなようにお使いください。」大迫さんのご長女は快諾してくれた。

はじめて大迫さんからアルバムを見せてもらったのは1998年、ご長女からそれを借り受けたのは2009年、既に11年が経過していた。それ以来、私は毎晩のようにアルバムの人たちと対話した。

「あなた方は一体ヨーロッパのどこから逃げてきたのですか？そして日本を通過してどこへ行ったのですか？今も元気に暮らしているのですか？」

“圧巻だった”と表現したそのページには、上段に3人、下段に4人。それぞれの写真の裏面には手書きのメッセージが添えられていた。なんと書かれているのだろうか。早速、当時つきあいを始めていたイスラエル大使館に解読を依頼した。

## 7人の写真

以下、判明したメッセージの内容と私の想像をもとに7人のプロフィールをご紹介します。

まず、写真1の上段左の唯一の男性(写真3)。きれいな文字のフランス語によるメッセージは「わが良き友、大迫辰雄にわが良き思い出を」と大迫さんに対する親愛の情を表している。フランスから来たのだろうか。それともフランス語圏のベルギーからだったのだろうか。署名は「I. Segaloff」と読み、日付も1941年3月4日とはっきりしている。



写真3 N.Segaloffの署名

上段中央の女性(写真4)。ハッと息をのむような美貌である。大迫さんが「絶世の美人だった彼女」と写真の下に記してあるのもうなずける。メッセージはノルウェー語で「日本の私の友へ」。ノルウェーとは予想外であった。北欧の国の女性にとって日本ははるかかなたの未知の国であっただろう。署名は「Vera Harrang」と読めるが、日付は判読できない。



写真4 Vera Harrangの署名

上段右の女性(写真5)。ブルガリア語のメッセージで「ヘニイ(本人の名前)からあなたの思い出に」。ブルガリアは国王がナチスの要請を拒否し、ユダヤ人の強制収容所送りを阻止したというが、それでもやはり逃げ出さねばならなかったのだろうか。日付は41年4月5日と読める。大迫さんの乗船勤務の終わりの頃である。



写真5 ブルガリア語で「あなたの思い出に」のメッセージ

下段左端の女性(写真6)。6人の女性の中で最も物静かそうな雰囲気を持ち主で、メッセージはポーランド語で「私を思い出してください」とのみ。署名がなく、日付は「40」、「X」、「2」から判断して、1940年10月2日の可能性が高い。

その右の女性(写真7)。同じくポーランド語で「私を思い出してください」と記されているが、続けて「素敵な日本人へ」の文言が加えられている。率直に言って、この女性が最も強く私の心を揺さぶった。それは、ナチスに追われたユダヤ人たちの苦悩を凝縮したような表情のせいかも知れ



写真6 署名の無いポーランド語のメッセージ



写真7 「素敵な日本人へ」とポーランド語で感謝のメッセージ

なかった。署名は「Rosla（ロズラ）」と読めるが判然としない。

さらにその右の女性（写真8）。きれいな筆跡で書かれたフランス語のメッセージは「心を込めて」と。署名は明瞭な文字で「Marie（マリー）」となっている。かすかに笑みをたたえているが、着ている服はかなりくたびれており、切迫した状



写真8 「心を込めて」とフランス語のメッセージ

況の中で撮られた様子がかがえる。

下段右端の女性（写真9）。ドイツ語のメッセージは「親愛なる大迫さんへ 1941年3月22日 天草丸にて」となっており、7人の中でただ一人、「天草丸」の名前を記している。「この船のお陰で私たちは助かったのだ！」と言いたかったのだろうか。署名は「Toni Altschu...」となっているが、最後の方の数文字が欠けているのが惜まれる。



写真9 「天草丸」と記したドイツ語のメッセージ

## アメリカへの旅

“病膏盲びょうこうに入る”ではないが、大迫アルバムの人たちがその後どうなったのかをどうしても知りたくなり、ついにアメリカに出かけることを決心した。

しかし、闇雲に行っても成果はおぼつかない。天草丸で敦賀に上陸したと思われる人たちに会い、アルバムを見てもらうのが一番の早道だと考え、敦賀市と杉原千畝の生誕地である岐阜県八百津町に、いわゆる“杉原サバイバー”と呼ばれる人たちの連絡先を照会したところ、幸いにも今なお健在の9人の情報を得ることができた。

2010年8月29日、私はいまだ猛暑の続く成田空港を飛び立った。目指す訪問地はヒューストン、ボストン、ニューヨーク、ワシントン、シカゴである。

勇躍機上の人となった私だったが、一抹の不安がないことではなかった。なにしろ70年前のことである。これから会おうとしている人たちの大半

は日本にやってきたときは子供だったし、仮に彼らがアルバムの7人を覚えていたとしても、この7人が今でも健在である可能性は極めて低かった。

しかし、もう後には引けなかった。だんだん小さくなって行く空港周辺の景色を眺めながら、私は覚悟を決めた。

25年ぶりに訪れたヒューストンは、日本顔負けの湿度の高い暑さだった。翌朝ホテルに迎えに来てくれた最初の面談者、イーディス・ヘイマーさんは銀髪の美しい小柄な女性だった。

「私が日本経由でアメリカに到着したのは3歳のときでしたから、当時の記憶はまったくありません。残念ですが、このアルバムの人たちのことも皆目見当がつきません。ですが、それから数年して私が少し成長したとき、父がユダヤ難民救済委員会から借りていたお金を全額返済し終わりました。その時の父の誇らしげな顔は子供心に今でもはっきりと覚えています。私の両親が杉原さんから頂いたビザの番号は7番と8番で、杉原リストの第1ページに出ています。せっかく杉原さんに助けていただいた命ですので、これからもまだまだ元気で生きていくつもりです。ですから、あなたも必ずもう一度ヒューストンに来てくださいね。」差し出されたヘイマーさんの手は温かく慈愛に満ちていた。

ボストン郊外の老人ホームで待っていてくれたサミュエル・マンスキーさんは、事前に見ていた写真よりかなり面やつれしている印象が否めなかった。

「実は私は今ガンを患っています。しかし、死ぬことはまったく恐れていません。あの過酷な運命を生き延びて来れたうえに家族にも恵まれました。3人の息子がいますが、2人は大学教授、1人は銀行の役員として立派にやっています。来月90歳になります。杉原さんのお陰でここまで長生きできて十分に幸せだったと思っています。このアルバムの人たちですか。さあ、もう70年も前のことだし、あの時われわれ家族が一番下の階の船室にこもりっきりでしたからね…。覚えているのは、船がソ連の領海の外に出たとき、甲板から大

歓声が沸き起こり、全員が甲板に出て、今のイスラエル国歌の「ハティックバ」を歌いだしたことです。その後上陸した敦賀は私たちにとってまさに天国でした。街は清潔で人々は礼儀正しく親切でした。バナナやリンゴを食べることもできました。特にバナナは生まれて初めての経験でした」

老人ホームの玄関まで送ってくれたマンスキーさんは、私の乗ったタクシーが発車するまでその場を動こうとしなかった。私がマンスキーさんの訃報を知ったのは、それから9か月後の2011年6月のことだった。

ニューヨーク・マンハッタン中心部の超高級マンションの一室で、にこやかに私を迎えてくれたのはシルビア・スモラーさん。八百津町の杉原千畝記念館に、両親と自分の3人の命を救ってくれた杉原ビザが押されたパスポートを寄贈した人物として知られる。杉原サバイバーのほとんどは、寄贈の要請に対して「それだけご勘弁願いたい」と応じるが、スモラーさんはただ一人快く応じたのだという。

スモラーさんに訪問の目的である大迫アルバムを見てもらった。

「こんな貴重な写真をわざわざ日本から…。残念ながらどの人にも心当たりがありませんわ。でも、大迫さんはなんとハンサムな方だったのでしょ。もし、私が年頃の娘だったら、きっと恋をしていたにちがいないわ、ホホホ…」

私が気落ちした様子を見せたのだろうか、軽い冗談でさりげなく私の気持ちを気遣ってくれた。

そして、お返しにと言ってお見せてくれたのが1枚の写真。驚いたことに、それは神戸に滞在中、京都に旅行した際、清水寺の前で撮ったものであった。難民と言っても写っている人たちは全員立派な服装をしている。スモラーさんのお父さんはポーランド内務省のお役人で、政府内のユダヤ人としては最高の地位についていたとのことである。もう1つ驚いたのは、スモラーさん親子3人は敦賀市内の旅館で宿泊していたとのことである。

ヨーロッパを脱出した後、スモラーさん一家に日本でつかの間の休息の時間を過ごしてもらえた

ことを知り、私はなんとなくほっとした気持ちになった。

「ちょっと見てください。これが私の大家族です。子供が5人、孫が26人、ひ孫が…ええっと何人だったかな。」と誇らしげに1枚の大判の写真を見せてくれたのはベンジャミン・フィショッフさん。87歳の現役の銀行家である。「どれどれ、この人たちも天草丸に乗っていたのですね。いやぁー、心当たりはありませんね。と言うのも、私は天草丸で大変な難儀をしましてね。

忘れもしません、1941年3月13日のこと。我々の船が敦賀に到着し、入国係官が乗り込んできて我々のパスポートをチェックしたとたん、次の行き先国のビザがないから入国は認められないと言いました。係官には、入国した後、神戸ユダヤ協会のあっせんで必要な書類を整えるからと必死に訴えましたが、ウラジオストクに送り返されてしまいました。

すると、今度はソ連の官憲から“日本のスパイ”呼ばわりされ、数日間、船に閉じ込められました。結局、何の見通しもなく再び敦賀に向かったのですが、港に近づくと見覚えのある人が手を振ってくれていました。神戸ユダヤ教会の人でした。協会の奔走でやっとのことで上陸することが出来たのですが、あの時は本当に敦賀が天国に見えました。」数日前に会ったボストンのマンスキーさんも同じ表現を使い、敦賀に思いを馳せていた情景が私のまぶたによみがえってきた。

2010年9月14日、アメリカの金融界の大立者とされるレオ・メラメド氏と会うため私は朝から緊張していた。

実際のメラメドさんは拍子抜けするほど温厚そうな雰囲気の人だった。

「あなたの今回のアメリカ訪問の目的は、天草丸に関連する人探しとか…。なにしろ、あの時は真っ暗でしてね。だだっ広い大部屋に詰め込まれ、ベッドはもちろん、マットレスもない床の上に寝かされ、寒いので私は母にしっかりと抱かれて眠りました。海は大荒れで、船は揺れに揺れ、大半の人はバケツを持って甲板に上がっていきました。

臭いにおいが部屋に充満し、耐えきれませんでしたね。ま、それはともかく、あの船のお陰で無事に日本にたどり着けたのです。今、あなたの話を聞いて、日本の旅行会社にも助けてもらったことを初めて知りました。あなたの昔のボスだった大迫さんにもお世話になったようだが、心から感謝しています。敦賀港に近づくと、雪に覆われた周囲の山々が眼前に迫ってきましてね、実にきれいな景色でした。冬だというのにとっても暖かく感じました。なにしろ極寒のシベリアからやってきたのですから。」

面談中、とつとつとした私の英語にも終始穏やかな表情を浮かべ、丁寧に対応してくれたメラメドさんの最後の言葉「いやいや、遠いところをよく来てくださった。」は、何よりのねぎらいだった。

2011年4月3日、時事通信はメラメドさんが東日本大震災に際し、「日本は今の苦難を乗り越えると確信している。」とエールを送ったことを報じていた。

## ついに身元判明

それから3年経った2014年4月のある日、ついに7人のうちの最初の1人が判明した。大迫アルバムの下段左から2番目のあの女性だった。幸いなことに、デボラさんという名のご長女がニューヨークに住んでおられることも分かった。

「ロズラ (Rosla)」と読めた写真の彼女の名前は、実は「ゾシア (Zosia)」であった。ゾシアさんはアメリカに来た後、やはりドイツから追われてきたユダヤ人男性と結婚し、名前もソニア・リードとなり、3人の子供をもうけた。私が最も惹かれていたその当人が第一番に私の前に現れるとはなにか不思議な力が働いているように思えてならなかった。この写真はお子さんたちに戻してあげべきでは、と考えるようになった私はその機会を探っていた。幸運なことに、その機会は意外と早くやってきた。ゾシアさんの身元判明の知らせがもたらされてから7か月後の2014年11月24日、

在ニューヨーク日本総領事館のご好意で、写真の返還セレモニーが総領事公邸で盛大に執り行われた。会場にはデボラさんはじめ一族の多くが顔を見せた。ユダヤの人々がいかに家族の絆を大切にしているかを改めて知らされる場面だった。

「私の母が大迫さんに残したメッセージは、“私を思い出してください”でした。その母の望みは叶えられました。彼女は生き残ることが出来ただけでなく、確かに覚えてもらっていたのです。と同時に、困難の中にあつた私たちの同胞に向けられた日本の人々の親切もまた記憶されていたのです。」デボラさんの謝辞は会場を感動の渦に巻き込んだ。



写真10 右から2人目が長女のデボラさん

こうなると欲が出てくるのが人情というもので、あと1人か2人くらいは見つかってほしいものだ、というのが正直な気持ちだった。なんと、それが現実となった。

戦後70年を迎えた2015年、世の中は戦争当時の話題にあふれていた。それに呼応するかのように、7月に1人、8月にまた1人、9月には相次いで2人の身元が判明した。信じられない気持ちだった。

まず最初は、ドイツ語のメッセージを残した女性。正式の名前は「Antonina Altszuler」でポーランド出身。敦賀に上陸した後、神戸から上海に移動し、1949年になってようやく渡米。結婚したものの夫は数年後に死亡。最終的にはカリフォルニアに移り、カリフォルニア大学ロサンゼルス校の図書館員として38年間勤め、1994年に75歳で他界した。その際、遺産60万ドル（約6千万円）を

同図書館に寄贈した。子供がいなかったため身寄りもなく、晩年の消息はつかめていない。

次は、ブルガリア語の女性。写真の表面に印字されていた「ソフィア」を示すキリル文字から、ブルガリア出身であろうとの推測は当たっていた。幸いなことに、アメリカにご長女が住んでおられることが分かり、早速連絡を取った。ところが、「母のことは絶対に公表しないでほしい。もし、公になった場合、私たち家族が傷つくことになる。」と思いがけない展開であった。前出のソニア・リードさんの時のように、てっきり喜ばれるものとはばかり思い込んでいた私は頭から冷水を浴びせられる思いだった。

誰しも、他人には触れられたくない心の傷があるのだということに気づかされ、良い教訓となった。

ただ1人の男性は、フランス語圏からの人物だとばかり思っていたが、彼もブルガリア出身であった。正式な名前は「Nissim Segaloff」であったが、アメリカに移ってきたのち「Nicholas Sargent」に変えている。アメリカの代表的なスポーツ週刊誌「Sports Illustrated」は、彼はバックギャモン（“西洋すごろく”と呼ばれるゲーム）の世界的名手で、1964年にグランド・バハマ島で行われた第1回国際バックギャモン大会で優勝こそ逃したものの、最後まで勝ち残ったと報じている。にもかかわらず、その後の足取りが不明なのはきわめて不思議である。名前を変えた事実と考え合わせ、なにか謎めいたものを感じさせる。

## ユダヤ人でないがゆえに

連鎖反動的に身元が判明した4人の最後は、“フィナーレ”を飾るに相応しい人物であった。あの美貌のノルウェー人女性である。幸い、ニューヨーク近郊に住む長女のリングさんに連絡が取れた。「あなたはなんと素晴らしい活動に取り組んでいるのでしょうか。母のことにに関して私が知っている限りのことはお話したいと思いますから、どうぞなんでもお尋ねください。」

予想以上に好意的な返事に意を強くした私は、思い切ってリンダさんを訪ねることを決心し、12月にニューヨークに飛んだ。驚いたことに、ヴェラ・ハラングという名のノルウェー人女性はユダヤ人ではなかった。私が初めて大迫さんからアルバムを見せてもらった時、杉原千畝の関係から、アルバムの7人は全員ユダヤ人だと思い込んでいたのだ。では、彼女はなぜヨーロッパから逃げ出さなければならなかったのでしょうか。ホロコーストの犠牲者は、ユダヤ人であるがためにナチスの迫害を受け、強制収容所に送られて命を奪われたのであるが、逆に、ユダヤ人でないがために、ナチスの非人道的な政策の犠牲になった多くの人々がいたことを、私は不明にして知らなかった。ヴェラさんは、まさに危機一髪のところでその犠牲から逃れることのできた稀有な一人だったのである。若いころ、ノルウェーの赤十字社で働いていた彼女の美貌はつとに評判であった。当時、イングリッド・バーグマンはすでに有名な女優であったが、彼女に匹敵するくらいの美貌の持ち主だったヴェラさんに映画界入りを勧める声もあった。しかしながら、1940年4月にドイツがノルウェーに侵攻したため、その話は立ち消えとなり、愛国者だった彼女はドイツ軍に抵抗するため、地下組織に入ろうとした。

ドイツ侵攻後、ノルウェーでは若い女性が頻繁にさらわれるようになり、ヴェラさんの母親は娘の身の安全を考え、彼女をアメリカに逃すことにした。前述のナチスのもう1つの非人道的政策とは「レーベンスボルン（生命の泉）計画」と呼ばれるもので、彼らは、金髪で青い目をした人間を優秀な民族とみなし、“金髪碧眼”の若い女性を誘拐し、強制的にナチスの親衛隊員との間に子供を作らせた。生まれてきた赤ん坊は、子供のいない親衛隊の家庭に養子として引き取られ、ドイツ人として育てられた。ノルウェー国内には、そのようにして生まれてきた赤ん坊を一時的に世話をする「レーベンスボルン」の施設が多く存在した。

母親の勇氣ある賢明な判断によって、危ういところでナチスの魔の手から逃れることができたヴェ

ラさんが、日本の敦賀を経て無事にアメリカにわたり、人生を全うしたとの話を聞きながら、私は「事実は小説より奇なり」を強く実感した。

長女のリンダさんが見せてくれたパスポートの記載によると、ヴェラさんは1917年、ノルウェーのドゥラメン（Drammen）という町の生まれ。体格は中背、目はブルーで金髪。アメリカへの逃避行の経緯は以下の通りだった。

まず、1941年2月1日にスウェーデンのストックホルムのアメリカ大使館で移民ビザを取得。3日後の2月4日、日本大使館で通過ビザを取得した後、ソ連領事館に赴き同じく通過ビザを取得。2月10日、モスクワ市労働農民警察で2日間のモスクワ滞在を登録。その後シベリア鉄道に乗り、ウラジオストクで大迫さんが勤務する「天草丸」に乗船。真冬の厳しい日本海を渡り、2月23日に福井県敦賀に上陸。3月6日、日本郵船の「龍田丸」にて横浜出港、3月20日、サンフランシスコに到着。ストックホルムで米国移民ビザを取得してから僅か48日で最終目的地にたどり着いている。よほど周到に準備された逃避行だったのであろう。

自由の地アメリカに到着したヴェラさんは1942年、オーストリア出身のユダヤ人のエミル・クロンベルグ氏と結婚。1949年、リンダさんを出産。1974年、エミル氏死去、享年72。ユダヤ人として苦難の道を歩んで来たにちがいないエミル氏は15歳年下のヴェラさんを生涯愛していたという。祖国を追われた2人が身を寄せ合って生きてきた様子がしのばれる。

ヴェラさんは祖国ノルウェーには2度里帰りしたのみで、2001年に84歳の生涯を閉じた。最期まで慎み深い人柄だったという。私が、「もし、あの時、ヴェラさんが映画界入りしていたら、きっとハリウッドの人気女優になっていたでしょうね。」と言ったことに対し、リンダさんの答えは「さあ、どうだったでしょうね。」と、母親に似てあくまでも控えめだった。



## おわりに

大迫アルバムに触発され、7人の足取りを追うのに夢中になっている間に早や7年が経とうとしている。取材と講演で訪れた国はアメリカ、カナダ、イギリスの3カ国、訪問した海外の都市は10都市にもなる。それをもとに、2012年に『命のビザ、遙かなる旅路』(交通新聞社刊)を上梓したところ、各方面から好評を得た。さらに、周囲の勧めもあって2014年にはその英訳版(朝文社刊)を出すこともできた。

一方、人探しの方は既述の通り7人中5人までも身元が判明し、その内2人の遺族に会い、詳しい話を聞くことができた。70年余りの時空を超えての身元判明は、ほとんど奇跡に近いと言えよう。

7年間の人探しの旅に導いてくれた大迫アルバムは、昨年10月に大迫さんのご長女のご理解を得て敦賀市に寄贈された。同市では精巧なレプリカを作製し、その中に納まっている7人の人たちが上陸した敦賀港を見渡す「人道の港敦賀ムゼウム」に展示されることになった。彼らにとっては実に75年ぶりの里帰りとなったわけである。

敦賀は1945年の終戦直前、米軍の空爆によって市街地の大半が焼失したため、ユダヤ難民に関する物証がほとんど残っていない。その中であって、このアルバムは当時を物語る希少な証人となってくれることであろう。一人でも多くの人に見てもらいたいと願ってやまない。